



美・知・匠のものづくり都市をめざして —イノベーターの孵化器としての「京都カレッジ」構想—

同志社大学大学院 教授

技術・企業・国際競争力センター 副センター長

山口 栄一

1. はじめに

先日、フランス人の旧友が2人、久しぶりに私を訪ねてきた。私は、東京で彼らを迎え入れた。

1人目はフィリップ。ベトナム戦争直後のベトナムで生まれ、ニューカレドニアで幼少期を過ごし、ニースで高等教育を受けて、今はアメリカ東海岸に住んでいる「回遊」人だ。なにより世界的な数学者。私が4年前にイギリスのケンブリッジに住んでいたころ、大学のカレッジで一緒に食事をする仲になり、それ以来「心の友」になった。

私も20年前、コートダジュールに5年間、住んでいたことがあるので、ひとしきりニースやアンティープそしてカンヌの街々のことやそして最近の変遷（たとえばつい最近、ニースの街にチンチン電車が走り始めたこととか、ボードメールという海岸道路に自転車専用道が付けられたこととか）について語りあったあと、話題は日本の街に及んだ。彼にとっては、初めて訪れる日本だった。昼食を取りながら、

「日本の初印象はどうだい」と私が決まりきった質問をすると、彼は言った。

「どの街にも電柱が林立し電線が張り巡らされているのは、醜いよね。日本人は、電柱と電線があっても気にしないのかな。でも、村上春樹の最新の小説『1Q84』に『醜い電柱が、空中に意地悪く電線を張り巡らせていた』とか『電

柱と、絡み合った醜い電線が見える』とか執拗に書いているところを見ると、電柱を嫌っている人もいるみたいだけど」と、村上春樹オタクらしい分析を始めた。そして続けた。

「それを差し引いても、でも日本は美しくて、それになんとかほっとするよ」

「どこが、ほっとするんだい」

「きっと、路地の家並みの表情がほっとするんだと思う。アメリカの道路はとにかく広くてまっすぐだろう。あれは、落ち着かない。日本の路地は両側に家並みが連なっていて、複雑に折れ曲がっているし、美味しそうな匂いもいたるところからやってくる。子供たちが路地で遊んでいる風景なんて、アメリカではないよね」

2. 日本にしかない「美」

2人目は、ジャン＝ドミニク。今ではスイスのレマン湖のほとりの街ローザンヌに住んでいる情報学者だ。私たちは学生時代、本郷にある寄宿舍にいっしょに住んでいた。

それは、古い歴史をもつ財団法人が経営する寄宿舍だった。たった25戸の個室しかなくて25人の学生しか入れないこじんまりした場だったけれど、うち2人はフランスからの（その1人がジャン＝ドミニク）、そして2人は台湾からの、それから1人は韓国からの留学生。たまたまゲストルームに、アメリカ人の大学教授が1年間滞在していたので、みんなでいっしょに食

べる夕食は、まだ見たことのない世界の話題に満ちたものだった。

夕暮れ時に、私はジャン＝ドミニクとその本郷の寄宿舎で待ち合わせた。すっかり白髪になってしまった彼は、私をすぐに見つけ出した。一瞬にして私たちは35年前に戻った。彼は開口一番こう言った。

「この寄宿舎から、ぼくはよく富士山を見ていたんだ。また見てみたいな」

「ほんとかい。ぼくは興味なかったから覚えてすらいらないな」

「ほんとに見えるはずなんだよ。行ってみよう」

彼はそう言って、私を寄宿舎の4階に引っ張っていった。

たしかに見えた（写真1）。彼は「35年前のあのころはビルがそんなに建ってなかったから、富士山のすそ野まできれいに見えたけれど、今では頭だけしか見えない。けれど、今でも富士山の色は変わらないよ。ああ、やっと日本に帰ってきたんだな」とため息をついた。

数十年ぶりに会ったのに、私たちはすっかり昔の「同じ釜の飯を食った」友人に戻っていた。夜遅くまで寿司をつまみながら、彼は



写真1 ジャン＝ドミニクが、寄宿舎の4階で撮った富士山の写真

「日本は美しい」とすっかりはしゃいでいた。

「スイスのほうが圧倒的に美しいだろう」と私が言うと

「もちろん、スイスはまるで水を打ったように美しいさ。でも、日本の美しさはそれとはちがう美しさなんだ」と彼は反応した。

「日本人のぼくには、それがまったく分からないよ。日本の何が美しいんだろう」

「たとえば、空の色、山の色、そして街の路地裏の陰影。それらは、ヨーロッパにはないんだな。だいいち君はいま京都に住んでいるんだろう。京都の街の陰影のダイナミズムはすごいぜ。それがもたらす『美』は世界広しといえど、京都にしかないんだ。京都にも住んでみたかった。ああ、今からでも京都に住みたい」

当時、彼はこの寄宿舎には1年しかいなかったのに、私たちは、将来の不安やら世界のゆくえやら、そして哲学や科学の未来のことを毎日語りあったものだった。35年ぶりに訪れる日本を、彼はすっかり堪能していた。

3. 新しい「共鳴場」を構想しよう

「いっしょに同じ釜の飯を食う」というほんの些細なこと。たったそれだけで、私たちは「心の友」になることができる。

それは、フィリップについても同じだった。彼ともやはり1年間だけの仲だったのに、ケンブリッジのカレッジで毎日同じ釜の飯を食い、学問のこと、世界の未来のことをいつも語り合っていた。だから、すぐに昔に戻れたのだった。

そんな風に、同じ釜の飯を食う「場」を日本に創りたい。とても些細だけれど、じつは、それこそがとんでもないブレイクスルーの契機を



写真2 クレアホール・カレッジ。日本の小学校くらいの敷地面積に約50世帯の客員フェローと50人の大学院生が住む。

もたらず。私は心からそう思った。

世界中から「知」をたずさえた人たちが、その「場」に自然に集まってくる。それぞれの「知」はまったく異質で異分野であればあるほど、楽しく面白い。そしてそこでの化学反応で、まったく新しい「知」が生まれ、その「知」にもとづいて、新しいビジネスが生まれる。

そんな「場」のことを「共鳴場」と呼んでみよう。男性もいれば女性もいる。それぞれの人の出身国もバラバラ。携えている「知」も分野もバラバラ。年齢もバラバラ。できれば、そのバラバラさに偏りがなければいいほどいい。日本人だけではもちろんダメだし、学者だけ、あるいは理系だけ、文系だけでもダメだ。大事なことは、人生の目標やゴール設定もバラバラだけれど、お互いにお互いの価値とそのゴールの尊さを認め合い、共鳴し合うということだ。もちろん自分自身の完全なる自由を確保して、他者を縛ったり統制したりはしない。

どうすれば、「共鳴場」が発生するか。

それは、「同じ釜の飯を食う」ということからすべてが始まる。

4. ケンブリッジ大学のカレッジとは

そんな「共鳴場」の典型例として、フィリップと過ごしたケンブリッジ大学のクレアホール・カレッジ（写真2）を眺めてみよう。

カレッジといっても、「単科大学」のことではない。ケンブリッジ大学とは、日本の大学のように、どこかに広いキャンパスがあるのではなく、31あるカレッジの集合体。もちろん学部の実験室や講義室の領域もあって、いわば各学部の「縦糸」をカレッジという「横糸」が紡ぎだした構造をしている。

ケンブリッジ大学は国立大学なのだけれど、各カレッジはみずからの土地や建物をもっている。もっとも有名なトリニティ・カレッジ（17世紀にアイザック・ニュートンが学生生活を営み、のちにそのフェローになった）は、ケンブリッジからロンドンまで自分の土地だけを通って歩いていけるそうだ。

そのカレッジは何をやる場所かといえば、第1に「同じ釜の飯を食う」ところ。第2に「住む」ところ。この食・住は、1209年にケンブリッジ大学が生まれたときからの伝統で、大学とは学生がフェローから個人教授を受ける場所だった。だから第3の機能は、「学生がフェローから1対1で教えるをうける」ところ。今では、ケンブリッジ大学の教授たちはカレッジに住むことをしないものの、講師以上になると、多くがカレッジのフェローにもなって、学生たちを個人的に教える。しかし外国の大学や企業からやってくる客員フェローはこのカレッジの中に住み、学生たちと共同生活を営む。

私は、ケンブリッジ大学のクレアホールというカレッジに一年間住んだ。クレアホールは、ケンブリッジ大学で2番目に古いクレアカレ

ジが、国際交流の場づくりを目的として1965年につくったカレッジで、外国人の学者（ほとんどサバティカル¹⁾でやってきた大学教員）を客員フェローとして迎え入れ住まわせることが、主たる目的だ。もちろんカレッジとしての機能、つまり大学院生を住まわせる機能も持っている。

敷地面積は、日本の小学校とほぼ同じ程度の大きさ。ここに約50世帯の外国人の家族と約50人の大学院生が住んでいる。ここに収容しきれない約50人の大学院生は、周辺のアパートをクリアホールが借り受け、そこに住まわせている。

ここでは、昼食と夕食で、みんなが同じ釜の飯を食う（写真3、4）。カレッジの中に住む客員フェローや大学院生はもとより、周辺のアパートに住むカレッジメートも食事は一緒に食べる。

31のカレッジが食事の旨さを競い合い、毎年

そのランキングが発表されるので、カレッジの食事はどこでも美味しい。外国人の客員フェローは、毎月20食まで無料という特典があるので、食事はなるべくカレッジでとる風習が生まれ、食事時は国際色豊かだ。

そもそも大人たちがいっしょに食事をするので、学生たちの行儀も良くなる。とくに毎週水曜日はフォーマルディナーとしてネクタイ着用が義務付けられ、しかもゲストを自由に招いてよいので、大学院生たちは競ってパートナーを連れてくる（フィリップもパートナーを連れてきていたので、おかげで彼らの結婚式に招待されたり赤ん坊を抱かせてもらったりする仲になった）。

すっかり学生たちになつかれた私は、大学院生で起業したいという若者たちの相談に乗ることとなった。食事のあと、私の周りにはさながら起業家学校の様相を呈した。彼らは博士号取得後、会社を起業し今でも立派にその会社を成長させ続けている。



写真3、4 クレアホール・カレッジでのフォーマルディナーの風景。初対面の大学院生やそのパートナーといっしょに食事。



5. 「京都カレッジ」構想とは

こうして私は、2009年に京都に帰ってきて、あるアイデアを得た。このしくみを京都に創ろうと。仮称「京都カレッジ」だ。というのも、食事時に必ず私に浴びせられる質問が、「次のサバティカルでは、ぜひとも京都で1年間を過ごしたいけれど、京都には、このケンブリッジのカレッジみたいなのはあるの？」だったからだ。もし誰にでも開かれたカレッジをつくれれば、きっとノーベル賞級の学者も、そこに住みたいとやってくるにちがいない。私はそう直感した。

「京都カレッジ」のもっとも重要な機能は、もちろん「共鳴場」として、「同じ釜の飯」を提供することだ。

廃校になった小学校を改装すれば、外国人の学者家族が50世帯程度暮らせる空間と大きな食堂が作れる。まわりの町家やアパートを借りたとしても、食事時一緒に集まって「同じ釜の飯を食う」環境さえきちんとつくれば良い。

大学院生と、諸外国の研究者（主としてサバティカル）、そして京都発ベンチャー企業の起業家たちにそこに居住する資格を与える。ただし、企業は、たとえば2,000万円を寄付したら、その企業の研究者を一人だけカレッジに住まう権利を10年間与える。

小学校の跡地などを利用し、20社ほど寄付が集まればこの「京都カレッジ」は実現する。世界中の学者たちがぜひとも京都に住んでみたいと思っていることを、ケンブリッジで私が実際に証明したので、この「京都カレッジ」が実現すれば、ノーベル賞級の学者がひっきりなしにここに住むことになるだろう。

重要なことは、この「京都カレッジ」が未来

の私たちの住まい方のモデルを提供するということだ。近い将来、日本の4割以上の世帯が単身世帯になると言われている。また、高齢社会が無縁社会になってしまったとき、人々のきずなは途絶え、コミュニティは損なわれてしまう。グループホームに高齢者だけが住むのでは、「高齢者を隔離する」という「上から目線」の政策になるし、若者たちとのあいだのつながりが生まれない。

そこで、「カレッジ」だ。そこには老若男女のみならず、国籍を超えた人々がつどい、いっしょに同じ釜の飯を食う。たくさんの「知」をもち、たくさんの国を「回遊」してきた人々がいるので、だれもがそこに住みたいと思う吸引力が確実に現われる。

そしてもっとも大事なことは、この「カレッジ」が誰に対しても開かれていて、京都のどこかの大学院生になるか、みずからベンチャー企業を起こせば、だれでも住む資格を持つということだ。

子育てを終え、定年退職をしたら、もう一度勉強して修士号や博士号を取りたい。あるいは、培ってきたみずからの「匠」の技術を活かして起業したい。そんな人々のだれにでも開かれているという点で、このモデルはケンブリッジ大学を超える。

6. イノベーションの源をつくるために

最後に、この「京都カレッジ」がイノベーションに与える影響について論じておこう。

イノベーションとは、大学などで生まれた「知」を「価値」に変えて社会を豊かにすることに他ならない。豊かにできたかどうかを見るのだから、小泉政権時代をのぞいてこの20年間

GDPを下げてきた日本は、イノベーションを怠ってきたと言ってよい。

なぜそんなことが起きたのか。

それは、イノベーションの源に対する考察を欠いてきたからだ。

イノベーションは、大学教授が起こすのではない。そうではなくて、大学院での研究で新しい「知」を獲得し博士号を取って大学院を修了した若者たちが起こすのである。

このことにいち早く気付いたアメリカは、1982年にSBIR法を成立させ、ベンチャー企業を強力に育成し始めた。SBIRとは、Small Business Innovation Researchの略、つまり小さい企業こそがイノベーションを起こすという仮説に乗って、3段階プロセスで、大学院を修了した若者の中からスターを発掘する制度である。大企業が実現できそうにない、数千に及ぶ開発課題を国が出し、第1段階（半年）で1,000万円、第2段階（2年間）で1億円を「賞金」（Award）として彼ら大学院出たての若者に授与する。年間予算はなんと30年間一貫して約2,000億円。こうして毎年約2000社が世に巣立っていくこととなった。

最近、私は大学院生の助けを借りて、2011年におけるバイオ企業の全米売上高ランキングを調べてみたところ、なんと1位から62位までの企業の27.4%が、このSBIRでインキュベート（孵化）されて巣立っていったベンチャー企業だった。

また、1995年から2005年まで大企業にM&Aされたトップ10バイオベンチャー企業のうちSBIRを得てキックオフした企業は20社に達した。その買収額を調べてみると、その総額は約10兆円となり、SBIR投資額に対して約1万倍

のキャピタルゲインをもたらしていることも分かった。

さらに、2011年度にSBIRの第2段階の「賞金」をもらったベンチャー企業の責任者の出身大学院を調べてみた。すると、29.2%は医学薬学系（うち11.0%は医師）、10.8%は生物工学系、10.4%は理学系化学専攻、9.6%は理学系物理専攻で、全員が博士号取得者だった。

じつは、日本にも1999年以来SBIR政策はある。この日本のSBIR政策で2010年度SBIR補助金をもらった「ベンチャー企業」の責任者の出身を調べたところ、40.2%が高校・高専卒、50.8%が大学学部卒で、大学院修了者はほぼ皆無だった。

まるで日本国は、大学で生まれた「知」を「価値」に変えて社会を豊かにする仕方を知らないかのようだ。日本のSBIR政策とは、名ばかりの中小企業支援政策に堕してしまったといっ

てよい。日本でSBIR政策が、イノベーションに何の効果ももたしていないとすると、他にどのような政策がイノベーションに寄与しているのだろうか。

その一つが、クラスター政策であろう。しかし、経済産業省がけん引してきた産業クラスター政策は、民主党による仕分けで廃止されてしまった。また、文部科学省がけん引してきた知的クラスター政策は最後まで貫徹できたものの、その補助金はあくまで大学教授に与えられたため、大学院生が起業して新しい産業を立ち上げるという効果をまったくもたらさなかった。

要するにこの20年間、国はイノベーションの源が何なのかについての考察を怠ってきたた

め、イノベーション政策はことごとく失敗してきたと言ってよい。そのことに国が気づいていない以上、今後もその方向を変えることはないだろう。

だからこそ、私たちは国に頼ることなく、みずからの手で、「知」を「価値」に変えうるイノベーターを育てていかななくてはならない。

その「共鳴場」としての「京都カレッジ」は、したがってそこに住まう大学院生にとっては稀有の孵化機能を持つことになる。なにしろ、サバティカルで世界中からやってきた研究者がそこに一堂に会し、毎日いっしょに食事をしたり終日雑談したりすることができるのだ。

彼らは日本の大学教授と異なって産業とのネットワークとインタラクションを強く持ち、SBIRを通して多くの起業家を育ててきた経験を持つ。また、異分野の人々との毎日の語らいは、多くのアイデアをもたらす。それは、ジャン＝ドミニクと暮らした本郷の寄宿舍を除いては、日本にはまったくなかった「共鳴場」に他ならない。

こうして、まちがいなく「京都カレッジ」は、イノベーションに重要な寄与をもたらす。この実現によって京都は、「知」と「美」と「匠」が共鳴的につながりイノベーションの花を咲かせる真の創造都市になることだろう。

著者略歴

1955年福岡市生まれ。1977年東京大学理学部物理学科卒業、1979年同大学院修士修了。1984年理学博士（東京大学）。

University of Notre Dame（米）客員研究員、NTT基礎研究所主幹研究員、IMRA Europe（仏）招聘研究員、21世紀政策研究所研究主幹

を歴任し、2003年より、現職。ハイテクベンチャー企業の(株)アークゾーン、(株)パウデック、ALGAN(株)3社を創業し、各社の取締役。

近著に『イノベーション 破壊と共鳴』（NTT出版 2006年）、『Recovering from Success: Innovation and Technology Management in Japan』（共著、Oxford University Press 2006年）、『JR福知山線事故の本質—企業の社会的責任を科学から捉える』（NTT出版 2007年）など。『FUKUSHIMA レポート』（日経BPコンサルティング 2012年）など。

注 1

研究休暇制度。欧米の大学では、教員は6年勤務したら1年間（または3年勤務したら半年間）サバティカルを取る権利を持ち、1年間、自由に外国にわたって研究調査をしたり執筆活動をしたりする。欧米の大学教授の7人に1人は、1年間サバティカルでどこか別の国などに滞在しているということになる。日本は、1年間ないし半年だけ滞在できる宿舍が限られているので、サバティカルで滞在しにくい国とみなされている。